

○事業所名	チャイルドステーションゆうゆう		
○保護者評価実施期間	令和7年2月3日	～	令和7年2月10日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	18	(回答者数) 18
○従業者評価実施期間	令和7年2月3日	～	令和7年2月10日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	11	(回答者数) 11
○事業者向け自己評価表作成日	令和7年2月21日		

## ○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	日常的に保護者と連携し、子どもの状況や課題について、共通理解を図って支援に努めている。	何かあった場合や気になることは、直ぐに職員間で話し合ってから検討した後、保護者に迅速に連絡している。	・職員の適切な支援ができるよう、虐待防止委員会(身体的拘束適正化検討委員会を含む)、研修会や情報交換の場を設け、共通理解を図る。 ・モニタリング等から保護者や子どもの願いや要望を把握し、支援の実際の対応に齟齬がないように努める。
2	定期的なお便りの発行、HPやSNSによる子どもの様子、支援プログラム、保護者向けのアンケートや自己評価の結果などの情報を子どもや保護者に発信している。	・お便りは、輪番で作成することで、複数の職員が多様な視点から子どもの成長を発見したり気付いたりしたことを、写真入りで発行している。 ・支援プログラムや評価結果をHPで公表し、支援の方針、取組の目標や根拠を明示している。	・子どもの変容や成長、取組の成果を随時発信していく。 ・お便り、HPやSNSの内容や発信について、意見や感想を直接聞く機会を設け、随時、意見を反映していく。
3	安全管理に配慮した支援を行っている。	・活動の計画立案の段階で、全職員で安全を確認し、活動の前には子どもを集めて事前指導をしている。実際の活動の場でも、担当を決めて個々の安全確保に努めている。 ・外出の際は、事前に危険箇所の回避を確認し、携帯電話を持参して緊急事態の際に連絡が取れる体制をとっている。	・事前指導の段階では危険回避の確認をし、実際の場面では自分で判断して安全に行動できるように声がけをする。 ・普段の集団活動の中でも、安全面を心掛けた活動ができるよう声がけをする。また、子ども同士が声をかけ合って、安全に活動することができるような雰囲気づくりをする。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	職員の配置数と専門性の発揮が、十分になされているか。	・子ども2人に職員1人は維持できているが、一对一の支援を要する子どもが多い利用日には、手不足を感じることもある。 ・具体的な支援の手立てや手順が明確になっているか、検証が必要である。	・室内と屋外の活動の場、個と小集団での活動の場を把握し、支援中に職員同士が声をかけ合って、支援担当を適宜スイッチする。 ・根拠を明確にした支援体制や支援プログラムを共有できるように、定期的に研修や情報交換をする。
2	相談対応の体制と迅速な対応は、十分になされているか。	・概ね良好だが、相談の窓口を明確にし、誰でも気軽に話せる雰囲気づくりが必要である。 ・受けた相談に迅速に対応できるように心がけているが、対応策を早期に検討する場が設けられなかったり、他の業務で忙しく対応の実際が遅延することがある。	・対応の流れを確認するとともに、何でも話せる雰囲気づくりを努める。また、一人一人の子どもの人格を尊重し、受容・共感など誠実に傾聴する姿勢のスキルアップを図る。 ・どんなに多忙でも、検討する時間を確保する。 ・記録の完備と実施後の成果と課題を整理し、次の相談や支援に生かす。
3	保護者会の開催や保護者同士の連携への支援は、ニーズを把握して対応しているか。	・仕事をしている保護者が多いため、日中の開催は難しい。 ・集まらなくても、メールや電話で伝達するだけで済む場合が多い。 ・保護者同士の連携の場を求める声やニーズがあまりない。	・顔を合わせて、直接、要望や意見を聞く機会を設ける。例えば、保護者会を開催する同日に、(仮称)「家族フリー参観日」を設けて、子どもの様子を自由に参観できるようにする。 ・子どもの将来を見据え、他機関への相談や親同士のネットワークづくりの機会を設ける。